花は盛りに

（第百三十七段）

要旨

花や月を見るのは、盛りのときだけがよいのではない。花は、盛りの前や後のほうが趣深いこともある。何事も同じで、恋の情趣も、逢えないつらさを嘆くことなどもよいものである。月も、満月よりも木の間から見えたり、雲に隠れたりした月が情趣を感じさせるのである。何事も目で見るだけではなく、心で感じるのがよく、さりげなく鑑賞するのが情趣を解する人のやり方である。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P三六・8〈言ふめる。〉	花や月は、盛りのときだけがよいのではない。花は、盛りの前後にも見どころはあるし、花を見られなかったことも情趣がある。
第二	P三六・9〈よろづのことも〉～P三六・12〈色好むとは言はめ。〉	多くのことも初めや終わりがよい。恋も逢えないことや不実を嘆くこと、かつての恋人を思い出すことも情趣がある。
第三	P三六・13〈望月の〉～P三七・3〈おぼゆれ。〉	月も、満月よりも木の間から漏れる雲がかかった月などは、情趣を解する友人が懐かしくなるほどよいものである。
第四	P三七・4〈すべて、月・花をば〉～終わり	すべてが目で見るだけではなく、心で感じることが大切である。さりげなく、情趣を感じることが情趣を解する人のやり方である。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①花（はな）　は　盛（さか）りに、　月（つき）　は　くまなき　を　のみ　見（み）る　もの
係助・提示　形動ナリ・用　係助・提示　形ク・体　格助・対象　副助・限定　マ上一・体

かは。　②雨（あめ）　に　向（むか）ひ　て　月（つき）　を　恋（こ）ひ、　垂（た）れこめ　て　春（はる）　の
係助・反語　格助・対象　八四・用　接助・単接　格助・対象　八上二・用　マ下二・用　接助・単接　格助・体修

行方（ゆくへ）　知（し）ら　ぬ　も、　なほ　あはれに　情（なさ）け　深（ふか）し。　③咲（さ）き　ぬ
ラ四・未　打体　係助・同類　副　形動ナリ・用　形ク・終　カ四・用　強・終

べき　ほど　の　梢（こずゑ）、　散（ち）り　しをれ　たる　庭（には）　など　こそ、　見（み）どころ
推・体　格助・体修　ラ四・用　ラ下二・用　完・体　副助・例示　係助・強意（係）

多（おほ）けれ。　④歌（うた）　の　詞書（ことばがき）　に　も、　「花見（はなみ）　に　まかれ　り　ける
形ク・已（結）　格助・体修　格助・場所　係助・同類　格助・目的　ラ四・已　完・用　過・体

に、　はやく　散（ち）り過（す）ぎ　に　けれ　ば。」　と　も、　「障（さは）る　こと
接助・逆確　副　ガ上二・用　完・用　過・已　接助・順理　格助・引用　係助・列挙　ラ四・体

あり　て　まから　で。」　など　も　書（か）け　る　は、　「花（はな）
ラ変・用　接助・理由　ラ四・未（了）書き手→読み手　接助・打接　副助・例示　係助・列挙　カ四・已　存・体　係助・提示

を　見（み）　て。」　と　言（い）へ　る　に　劣（おと）れ　る　こと　かは。　⑤花（はな）
格助・対象　マ上一・用　接助・単接　格助・引用　八四・已　存・体　格助・比基　ラ四・已　存・体　係助・反語

の　散（ち）り、　月（つき）　の　傾（かたぶ）く　を　慕（した）ふ　習（なら）ひ　は、　さる　こと
格助・主格　ラ四・用　格助・主格　カ四・体　格助・対象　八四・体　係助・提示　連

なれ　ど、　ことに　かたくなる　人（ひと）　ぞ、　「この　枝（えだ）、　か
断・已　接助・逆確　副　形動ナリ・体　係助・強意（係）　代　格助・体修

の　枝（えだ）　散（ち）り　に　けり。　今（いま）　は　見（み）どころ　なし。」　など　は
格助・体修　ラ四・用　完・用　過・終　係助・区別　形ク・終　副助・例示　係助・強意

①（桜の）花は満開のさま（だけ）を、月は曇ったところがない（澄み切った）ものだけを見るものだろうか（いや、そればかりではないだろう）。②雨に向かって（見えない）月を恋しく思い、（簾などを）垂らして（部屋に）閉じ籠もって春の暮れていくのを知らないのも、やはりしみじみとして情趣が深いものである。③（今にも花が）咲きそうな頃の梢や、（花が）散ってしおれてしまった庭などこそ、見どころが多いものだ。④和歌の詞書にも、「花見に参りましたが、もう散ってしまっていたので。」とも、「差し支えがあって（花見に）参りませんで。」などとも書いてあるのは、「花を見て。」と書いてあるのに劣っていることであろうか（いや、劣ってはいないだろう）。⑤花が散り、月が（西に）傾くのを残念に思う（人々の）習慣はもっともなことであるけれども、とりわけ情緒を解さない不粋な人が、「この枝も、あの枝も散ってしまった。もう見どころがない。」などとは言うようである。

言ふ　める。
八四・終　婉・体（結）

⑥よろづ　の　こと　も、　初め　終はり　こそ　をかしけれ。　⑦男
格助・体修　係助・同類　係助・強意（係）　形シク・已（結）

女　の　情け　も、　ひとへに　逢ひ見る　をば　いふ　もの
格助・体修　係助・同類　副　マ上一・体　連語（格助・対象＋係助・強意）　八四・体

かは。　⑧逢は　で　やみ　に　し　憂さ　を　思ひ、　あだなる　契り
係助・反語　八四・未　接助・打接　マ四・用　完・用　過・体　格助・対象　八四・用　形動ナリ・体

を　かこち、　長き　夜　を　ひとり　明かし、　遠き　雲居　を
格助・対象　タ四・用　形ク・体　格助・経時　サ四・用　形ク・体　格助・対象

思ひやり、　浅茅が宿　に　昔　を　しのぶ　こそ、　色好む　と
ラ四・用　格助・場所　格助・対象　バ四・体　係助・強意（係）　マ四・終　格助・引用

は　言は　め。
係助・強意　八四・未　推・已（結）

⑨望月　の　くまなき　を　千里　の　外　まで　ながめ　たる
格助・主格　形ク・体　格助・対象　格助・体修　副助・範囲　マ下二・用　存・体

より　も、　暁　近く　なり　て　待ち出で　たる　が、　いと
格助・比基　係助・強意　形ク・用　ラ四・用　接助・単接　ダ下二・用　完・体　格助・主格　副

心深う、　青み　たる　やうに　て、　深き　山　の　杉　の　梢
形ク・用（ウ音）　マ四・用　存・体　比・用　接助・単接　形ク・体　格助・体修　格助・体修

に　見え　たる、　木の間　の　影、　うちしぐれ　たる　群雲隠れ
格助・場所　ヤ下二・用　存・体　格助・体修　ラ下二・用　完・体

の　ほど、　またなく　あはれなり。　⑩椎柴、　白樫　など　の、　濡れ
格助・体修　形ク・用　形動ナリ・終　副助・例示　格助・体修　ラ下二・用

⑥（花や月だけではなく）何事でも、初めと終わりがことに趣深いものだ。⑦男女の恋愛でも、ひたすら逢って契りを結ぶことだけを（恋愛と）言うのであろうか（いや、そうではないだろう）。⑧結ばれないで終わってしまった（恋の）つらさを思い、はかなく実を結ばなかった（恋人との）約束を嘆き、長い夜を（逢うこともできず）ひとり（寂しく）明かし、遠く離れた場所（に住む恋人）に思いをはせ、（今はさびれた）茅が生い茂った荒れた家で（共に過ごした）昔を懐かしく思い出すのこそ、恋の情緒が分かると言えよう。

⑨満月が曇りなく照らしているのをはるか遠い所まで眺めているのよりも、明け方近くなって待ちに待って（ようやく）出てきた月が、たいそう趣深く、青みをおびているようなさまで、深い山の杉の梢に見えている、（その）木の間（越し）の月の光や、さっとしぐれを降らせた群雲に隠れた（その月の）様子などが、この上なく情趣深い。⑩小さな椎の木や白樫などの、濡れて

たる　やうなる　葉の　上に　きらめき　たる　こそ、　身に
存・体　比・体　格助・体修　格助・場所　カ四・用　存・体　係助・強意(係)　格助・対象

しみ　て、　心　あら　ん　友　もがな　と、　都　恋しう　おぼゆれ。
マ四・用　接助・単接　ラ変・未　婉・体　終助・願望　格助・引用　形シク・用(ウ音)　ヤ下二・已(結)

⑪すべて、　月・花　を　ば、　さ　のみ　目　にて　見る　もの
副　連語(格助・対象＋係助・強意)　副　副助・限定　格助・手段　マ上一・体

かは。　⑫春　は　家　を　立ち去ら　で　も、　月　の　夜
係助・反語　係助・区別　格助・起点　ラ四・未　接助・打接　係助・列挙　格助・体修

は　閨　の　内　ながら　も　思へ　る　こそ、　いと　頼もしう、
係助・区別　格助・体修　接助・継続　係助・列挙　八四・已　存・体　係助・強意(係)　副　形シク・用(ウ音)

をかしけれ。　⑬よき　人　は、　ひとへに　好け　る　さま　に　も
形シク・已(結)　形ク・体　係助・区別　副　カ四・已　存・体　断・用　係助・同類

見え　ず、　興ずる　さま　も　なほざりなり。　⑭片田舎　の　人
ヤ下二・未　打・用　サ変・体　係助・同類　形ナリ・終　格助・体修

こそ、　色濃く　よろづ　は　もて興ずれ。　⑮花　の　もと　に
係助・強意(係)　形ク・用　係助・強意　サ変・已(結)　格助・体修　格助・対象

は、　ねぢ寄り　立ち寄り、　あからめ　も　せ　ず　まもり　て、　酒
係助・区別　ラ四・用　ラ四・用　係助・強意　サ変・未　打・用　ラ四・用　接助・単接

飲み、　連歌　し　て、　果て　は、　大きなる　枝、　心なく　折り取り　ぬ。
マ四・用　サ変・用　接助・単接　係助・区別　形ナリ・体　形ク・用　ラ四・用　完・終

⑯泉　に　は　手・足　さし浸し　て、　雪　に　は　下り立ち
格助・対象　係助・区別　サ四・用　接助・単接　格助・場所　係助・区別　タ四・用

て　跡　つけ　など、　よろづ　の　物、　よそながら　見る　こと
接助・単接　カ下二・用　副助・例示　格助・体修　副　マ上一・体

いるような（光沢のある）葉の上に（月の光が）きらきら輝いているのは、身にしみて、この情緒を解するような友がいてほしいなあと、（そのような友がいる）都が恋しく思われる。

⑪総じて、月や花とはそのように目だけで見るものだろうか（いや、そうではない）。⑫春（の桜の頃）は家から外へ出ずとも、（秋の）月の夜は寝室の中にいるままでも、（桜や月のことを）思い描いていることこそ、まことに確実に、情趣を感じられるのである。⑬教養があり情趣を解する人は、むやみに愛好する様子にも見えず、楽しむさまもあっさりとしている。⑭片田舎の人こそ、しつこく何事ももてはやすのだ。⑮（花を見るときも）花のもとに、ねじり寄り近寄り、脇目もふらずじっと見つめ、酒を飲み、連歌をして、果てには大きな枝を、思慮もなく折り取ってしまう。

⑯（そんな人たちは）泉には手足を浸し、雪には下りたって跡をつけるなど、あらゆるものを、それとなく見るということがない。

なし。
形ク・終

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。知技(1)ウエ・(2)ウ 思判表B(1)ア　→**「言葉と表現」1**

❷「花」「男女の情け」「月」のそれぞれについて、作者が好ましいと考えている状態をまとめる。知技(2)エ 思判表B(1)イ　→**「学習のポイント」1**

❸「よそながら見る」とは、どのような態度か、読み取る。思判表B(1)ウ　→**「学習のポイント」2**

❹作者の立論のしかたの特徴を捉え、それをどのように評価するか考えさせる。主態　→**「言語活動」1**

❶係り結びや反語表現に留意し、論理の展開を追いながら、正確に現代語訳する。語句を抜き出して品詞分解させるなどして、重要な文法事項については、きちんと確認しておく。小テストという方法もあるし、板書してノートに書かせたものを確認するのでもよい。正解を全員に正しく伝えることは欠かせない。そのうえで、現代語訳を確認する。これも、押さえたい部分を小テストで確認するなどしてから、全体を通して、分かりやすい現代語訳になっているか、検討する。徐々に逐語訳から離れて、意味の分かりやすい訳となっているかを意識できるようにさせる。各自の訳を、お互いに添削するという方法もある。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストより、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、生徒同士の現代語訳の相互評価などにより、確認する。

❷段落ごとに「花」「男女の情け」「月」と主題が分れているので、各段落を読みながらまとめさせる。それぞれの項目についての作者の主張をノート等に書き出させる。その際に一般論も併記しておくとわかりやすい。一方的に一般論を否定しているわけではないことには注意したい。一般論はどういうものか。それに対して作者は何を主張しているのかを対置して、まとめる。両者の関わりが正しく説明できればよい。読解後なら、口頭で説明させ、過不足をその場で指摘しても理解させられるだろう。作者の主張自体は決して分かりにくいものではない。文章の修

辞などにごまかされないように注意させたい。

【評価】 時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

・作者の考え方について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

❸四段落目から作者の物事を鑑賞する態度への評価を読み取り、まとめる。「よそながら見る」ことを作者は評価しているのである。その態度と対照的な態度にも言及しているのでまとめやすいだろう。

【評価】 作者の考え方について、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

❹作者の論の特徴を捉えさせる。反語表現の多用からも考えられる。その上で作者の主張やそのやり方をもっともだと思う生徒、ちょっと考えが異なる、やり方には同意できないと思う生徒が出てくるだろうから、数人で意見交換させるとよい。意見交換後、改めて各自の意見を確認するのもおもしろい。大きく分けると、一般論にくみするものとそれに異議を唱える作者にくみするものとの二つに分かれるだろう。例のあげやすいものなので、実際に例をあげさせながら、主張を説明させるのがよい。作文としてまとめさせて、それを添削し評価する方法と、ディベートをさせて実際に意見を述べさせるという観点を加えて評価する方法とが考えられる。どちらも具体例から自説を導く過程がうまく展開されているかを現段階での重点課題としたい。

【評価】 進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、学習課題に沿って、論の立て方の特徴についてまとめ、その立論のしかたについて話し合おうとしているか、分析する。

《板書例》1　作者の主張（～～は一般論）

（花）花は盛りに、…のみ見るものかは。
↓ 見どころは満開の桜だけではない。

（男女の情け）ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。
↓ 一途に逢つて契りを結ぶことだけではない。

（月）望月のくまなきを…よりも、…。
↓ 曇りのない満月を眺めるよりも…。

《板書例》2　鑑賞態度の違い

情趣のわかる人　「なほざり」「よそながら」　粋
↔
片田舎の人　「色濃く」「ねぢ寄り立ち寄り」
（情趣のわからない人）　「あからめもせず」　無粋

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 各章段における作者の主張をまとめ、さらにそれに対する自分の考えをまとめる。思判表B(1)オ

❷ 序段も参考にしながら、随筆の特色を理解し、作品内容の多様性に興味を持つ。知技(1)ア・(2)イ

❶各章段の読解後、それぞれ内容や作者の主張をまとめていれば、それを読み返すのでもよい。その上で、各章段について各自の考えを書き添える。作者の主張や登場人物について自分の身に引きつけながら考え深められるとよい。

【評価】 各章段における作者の主張について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっているか、ノートのまとめや意見文により、確認する。

❷「参考」の序段を読んで、随筆とはどのようなものか、項目立てして整理する。「よしなしごと」を集めるからこそ、多様な内容を含むことを理解する。さらに、短い章段もあるし、内容もそれほど難しくはないので、自分で原文を読んでみることを勧める。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

指導上の注意点と発問例

●三六ページ

問　**「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。」（２行目）について、**
[1]「花」は、ここでは桜の花を指すが、「盛り」は、花のどのような状態を言うのか。
[2]「月はくまなきを」の「くまなき」とは、月のどのような状態を言うのか。
[3]「見るものかは」を現代語訳せよ。

答　[1]満開の状態。[2]月面に隈（曇り・影）のない状態。満月のときに、雲で隠れたりすることなく輝き光る状態。[3]見て賞美するものであろうか（いや、そうとは限らない）。

問　**(1)「雨に向かひて月を恋ひ」（２行目）、(2)「垂れこめて春の行方知らぬ」（２行目）とは、それぞれどのような状態か。**

答　(1)　降る雨を見ながら、姿を見せない月を恋しく思っている状態。(2)　簾（すだれ）や帳（とばり）などを垂らして部屋に閉じ籠もっていて、春の移り変わりも知らずにいる状態。

問　**どうすることを「なほあはれに情け深し」（３行目）と言っているのか。**

答　「雨に向かひて月を恋」うこと（降る雨に対しながら、見えぬ月を心に慕うこと）。また「垂れこめて春の行方知らぬ」ことである。

語句の研究

●三六ページ

２花は盛りに　「花」はここでは「桜の花」である。平安後期に固定した考え方と見られ、それ以前には「梅」を指すことも多い。「盛りに」は「満開の状態」を表す形容動詞の連用中止法であり、「花は盛りに」と「月はくまなき」はともに下の「をのみ見るものかは」に係る。

２月はくまなきを　「くまなし」はここでは「（月が）雲に少しも隠されていない状態」のこと。満開の桜と満月は春・秋を代表する景物とされていた。

２見るものかは　「見るものだろうか（いや、そればかりではない）」。「かは」は反語の意味を表す係助詞。この章段では反語が重要な意味を持つので正確に訳したい。一般的に陥りやすい考え（最高のものだけがよいという考え）を反語で一旦否定した後、自分の考えを展開していく構成になっている。

２雨に向かひて月に恋ひ　「類聚句題抄」に源順の「対雨恋月」という題での詩作がある。雨天に対して見えない月を恋い慕うのである。

２垂れこめて春の行方知らぬも　家の中に閉じこもって過ぎてゆく春の行方を知らないのも。「垂れこめて」は、帳や簾を下ろしてその中に身を引き籠もらせての意。「古今和歌集」春下「たれこめて春の行方もしらぬまに待ちし桜もうつろひにけり」（藤原因香）によるか。この歌の詞書に「心地そこなひてわづらひける時に、風にあたらじとておろしこめてのみ侍りけるあひだに、をれる桜のちりがたになれりけるを見てよめる」とあり、病を患った作者が簾を垂れて籠もっている間に、折り枝の桜が散っていくのを見て詠んだ歌。見ることのできない外の桜と春の移ろいを想うのである。

３なほあはれに情け深し　「なほ」は「それでもやはり」の意。「…も、やはり」で、「満開の桜」「雲のかからない月」を賞美するのは当然だが、「雨の日に見えない月を思う」「家に居て、花の様子を想像する」ことも「情け深い」という意味になる。一般論を否定しているのではないことに注意する。「雨に向かひて…」「垂れこめて…」の二つの部分はいずれも古句・古歌を踏まえており、古来より作者と同じような感じ

（簾を垂らして、部屋の中に身を引き籠もらせて春の暮れてゆくありさまを知らないこと）。

問 **「咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。」（３行目）と同じ趣旨のことを言っている一文を、第二段落から抜き出せ。**

答 よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。

問 **「『花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ。』とも、…『花を見て。』と言へるに劣れることかは。」（４行目）とあるが、どのような理由から、そう主張しているのか。**

答 作者の美意識から言うならば、花というものは満開だけを見るものではなく、今にも咲きそうな梢や、散りしおれた庭、また花自体を見ることができないことなども趣深いものだから。

問 **◉「花を見て。」（６行目）という詞書と比べて、他の二つの詞書には、どのような共通点があるか。**

答 満開の桜の花を実際に見たり、それらが散るのを惜しむ従来の桜を賛美する場とは異なる状況の中で詠んだ歌であるという点。

補 直後の文章に「花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは」とあることから、満開の桜の花を方をしていたことを示している。

3咲きぬべき　「（今にも花が）咲きそうな」。「ぬ」は強意（確述）の助動詞。

3散りしをれたる　「散り」「しをれ」の二語とし、複合語とはしなかった。桜の花が散って、それが地面でしおれていくと考えたほうが自然だからである。

4歌の詞書　和歌の前に、成立の事情、趣旨などを散文で記したもの。ここでは、自分の考えを補強するものとしてあげている。

4まかれりけるに　「まかる」は「来」「行く」の謙譲語。ここでは「行く」の意。中古の語法では「尊い人の所から退出する（「参る」の反意語）」ことだが、平安以後は丁寧語としての用法を発達させた。「に」は逆接の接続助詞。他に「花見に参りましたところ」と単純接続に解釈する説もある。

5散り過ぎにければ　下に「詠める（歌）」などを補って考える。なお、この詞書は作者の創作とも考えられるが、類似したもので「新古今和歌集」春下・良暹法師歌に

雲林院のさくら見にまかりけるに、みなちりはてて、わづかにかたえに残りて侍りければ
たづねつる花もわが身もおとろへて後の春ともえこそちぎらね

「新千載和歌集」春下・藤原義孝歌に

権大納言延光のもとに花見にまかりたりけるにはやちりにければよめる
桜花まだみぬ程にちりにけりのちの春だに心あらなん

とある。「新千載和歌集」の成立は「徒然草」よりも後だが、作者の義孝は平安時代中期の歌人であることから、その詞書の内容を兼好が思い出しながら書いたとも考えられる。

5まからで　下に「家にありて詠める（歌）」などを補う。「で」は打消の接続助詞「ずして」が「ずて」になり、さらにつづまったもの。前の詞書は花見に行き、これは実際には出かけていないが、いずれも花は見ていない場合について言っている。

5なども　「も」は同種のものを列挙する係助詞。「などとも」とあるべきところで、引用の「と」が省略されている。

6劣れることかは　「劣っていることだろうか（いや、劣ってはいない）」。「かは」は反語の意味を表す係助詞である。

7さることなれど　「もっともなことであるけれども」。上の「慕ふ」は「あとを追い

目にして、それが散るのを惜しむのが通例であったことがうかがえる。今回の文章はそれ以外の情景にも美しさが見いだせることを指摘したものであることをつかませる。

問「さることなれど」（7行目）は、次のどの意味に用いられているか。

(ア) 当然そうあるべきことで、そうあってほしいことなのだが
(イ) そういう気がして仕方ないのだが
(ウ) そういう昔からの習わしであるが
(エ) 一般の人情としては、自然であるが
(オ) それもつまらない取るに足りないことだが

答(エ)

問「かたくななる人」（7行目）は、なぜ「この枝…見どころなし。」（7行目）と言うのか。

答 桜の花は満開の時だけが見る価値があると思い込むので、散ってしまったら見ても意味がないと考えるから。

補 作者が考える「かたくなる人」のことである。作者は満開のときだけではなく、その前にも、その後にも、桜には風情があると考える。だから、満開だけを賞美するような人は無風流なのである。

問「遠き雲居」（11行目）「浅茅が宿」（11行目）は、それぞれ、その人にとってどのような離れにくい気持ち」のことで、「残念に思う」に近い意。「花が散る」ことと「月が沈む」こととを残念に思うのが「自然なこと」だと言うのである。その一般論を認めておいて、それだけではないという考えを展開していくのである。

7かたくななる人　「情緒を解さない不粋な人」。「かたくなり」は物事を固定的に考え、柔軟な思考ができないことを示す。ここでは、一般論に捉われて、それに従ってしか物事を見ることのできないことを言う。

8言ふめる　言うようである。「める」は婉曲の助動詞「めり」の連体形。距離を置いて、婉曲に余情をこめる表現。

9よろづのことも　花と月のことを受けて、それ以外の「全てのことも、何事でも」と論を発展させている。

9男女の情け　「情け」はここでは「恋愛」の意。花と月で自然の情緒について述べ、恋愛で人と人の間の情緒について述べようとしているとも考えられる。

9ひとへに逢ひ見る　「逢ひ見る」は恋人同士が逢って契りを結ぶこと。これが全て満たされた状態である。「ひとへに」は「いふものかは」に掛かって、「ひたすら」の意。花や月と同様の論の展開の仕方である。

10逢はでやみにし憂さ　「結ばれないで終わってしまった（恋の）つらさ」。これを始めとして、「浅茅が宿に昔をしのぶ」まで、報われぬ恋のパターンが五つ記されている。「あだなる契りをかこち」は結婚などの約束が遂げられなかった嘆き、「長き夜をひとり明かし」は恋しい人と夜を過ごすことができず、ひとり寂しく明かす様子、「遠き雲居を思ひやり」は遠くにいる恋しい人に思いをはせている様子、「浅茅が宿に昔をしのぶ」は昔の恋を終わったあとに思い出している様子をそれぞれ表している。「ひとへに逢ひ見る」を「盛り」の状態として、「盛り」に至らない場合や、それが過ぎてしまった場合などの、満たされていない状態を示し、第一段の桜の花の状態に応じている。この部分については、男性の視点から全て捉えた解釈もある。しかし「長き夜をひとり明かし」などは、「（待っても来ない恋人を待ちわびて）長い夜をひとり寂しく明かす」とすれば女性の立場となり、「蜻蛉日記」などで多く見られる場面になる。また、「待つ恋」という題で歌を詠む場合は、男であっても女の立場で読

うな場所か。

答 「遠き雲居」は、遠く離れてしまった恋しい人の居る場所。「浅茅が宿」は、恋しい人が居た場所で、今は荒れ果ててしまった家。「男の落ちぶれてしまった境遇を示す」という説もある。

補 いずれにしても、恋しい人とは逢えない状況であることを示している。いわば「満開ではない桜の花」と同じである。

問 **◉「昔をしのぶ」（11行目）とあるが、ここではどのようなことをしのんでいるのか。**

答 荒廃した家で恋人と逢っていた昔の思い出。

補 直前にさまざまな例があげられているが、内容と係り受けを正確に把握すれば対象となる表現が「浅茅が宿に」だけに限定されると分かるはずだ。

問 **第二段落には、恋が成就しなかった場合を五つ書いている。それぞれどのような恋か、本文の語を用いて答えよ。**

答 ①「逢はでやみにし（結ばれないで終わってしまった）」恋　②「あだなる契り（むなしい約束）」となった恋　③「長き夜をひとり（長い夜を恋しい人と共に過ごすことなく一人で）明か」す恋　④「遠き雲居（遠く離れてしまった恋しい人のいる所）を思ひや」る恋　⑤「浅茅が宿に昔をしのぶ（荒れ果てた場所で共に過ごした昔を思む場合が多いので、歌人でもある兼好がそのような視点で書いているとも考えられる。

「浅茅が宿に昔をしのぶ」については、「源氏物語」の桐壺において、更衣を亡くした帝が更衣をしのんで更衣の母に歌を送る場面や、「伊勢物語」において、男が会えなくなった女をしのび「月やあらぬ」の歌を詠む場面などが想定される。

10あだなる契り　（恋人との）はかなく、果たされることのない約束。恋人と、将来結婚しようと約束したが遂げられずに恨み嘆くのである。

11思ひやり　「やる」は、付く動詞の動作が「遠くまで及ぶ」の意となる補助動詞。

11浅茅が宿　「浅茅」は丈の低い茅のことで、荒涼とした場所を形容するのに用いる。「浅茅が宿」は浅茅が生い茂るような荒れ果てた家。恋人とともに過ごした家も、恋が終わって時が経ち、今となっては荒れ果ててしまったのである。

11色好む　「恋の情趣が分かる」。現代語の「好色」とは異なり、恋愛を通じて物事の美や情緒を解し、それに引かれる心が強いことを言う。これがほめ言葉であることを、ここでは理解させておきたい。

13望月の…　この一文は構造が複雑である。大筋は「望月のくまなき」よりも、明け方近く出た月の「木の間の影」「群雲隠れのほど」のほうが「あはれ」であるということになる。いろいろ説明はされているが、曇りない月よりも、欠けていたりちょっと隠れていたりする月がよい、という作者の主張を再度詳しく説明しているのであろう。

13千里の外　「はるか遠い所」。脚注に引かれている漢詩から和歌に引かれたものなどを参考にしているのだろう。漢詩の意味は「今夜は十五夜で満月がでているが、それを見て遠く離れた旧友のことを思いやっている」。

13ながめたる　下に「ほど」を補って考えると下文の「（群雲隠れの）ほど」と対応していることが分かりやすい。

13待ち出でたるが　「出でたる」の下に「月」を補って考える。「待ちに待ってようやく出てきた月が」。「が」は主格を表す。夜半過ぎに出る下弦の月で、夜が明けても空に残っている。述語は「青みたる」。

14木の間の影　「影」は、ここでは「月の光」のこと。木々の間をもれてくる月の光。月の姿そのものと考えても同じことである。

問　**「木の間の影」（14行目）とは、何のことか。**

答　木の間越しの月の光。

●三七ページ

問　**「またなくあはれなり。」（1行目）とは、何と何とを比べているのか。**

答　満月を眺めることと、欠けた月が木や雲に隠れているのを見ることを比べている。

補　満月を眺めることは何の不足もない状態で、「桜の花の満開の瞬間」と同じである。それより、不足のある状態の月を眺めるほうが「あはれ」だと、作者は説くのである。そのために、いろいろな説明を加えており、文の構造が複雑になっている。どこがどこに掛かるのかを慎重に読み解きたい。

問　**「都恋しうおぼゆ」（3行目）とあるが、それはなぜか。**

答　作者は今、山里にいるが、都には「心あらん友」（物の情趣の分かる友）がいるから。

問　**「さのみ目にて見るものかは。」（4行目）とあるが、ここで作者はどのようなことを主張したいのか。**

答　ものは目で見るだけではなく、その良さを想像しながら、味わうものである。

補　直後の部分に「思へるこそ」とあるのを参考にする。

問　**「いと頼もしう」（5行目）とあるが、どの**

う）」恋

「木の間の影」と下の「群雲隠れ」は並列されており、ともに「ほど」に掛かる。

●三七ページ

1うちしぐれたる　「しぐる」は晩秋から初冬にかけて雨がさっと降ってはやみ降ってはやみする状態を言う。「うち」は接頭語で動詞の意味を強めたり種々の意味を添えたりする。ここでは「さっと」くらいの意。

1椎柴　ブナ科の常緑高木である椎の木のこと。和歌で椎を詠むのに「椎柴」というのによるか。古来、「椎柴の本」「椎が本」は、世捨て人や僧の庵居する所とされる。

1白樫　ブナ科の常緑高木。葉の裏面が白い。椎と同じく、葉の表面に光沢があって硬く、それを「濡れたるやうなる」と形容している。前項の椎柴と併せて、都を離れた山中の情景であろう。

2きらめきたる　主語は「月の光」である。

2心あらん友もがな　「心あり」は、ここでは「情趣を解する」の意。反意語は「心なし」。「ん」は「…ような」の意の婉曲。「もがな」は体言に付いて、他にあつらえ望む終助詞。「…があればなあ、…てほしいなあ」の意。

3都恋しうおぼゆれ　作者は都を離れて、遁世していた経験をここに反映していると考えられる。山里にはいないが、都には「心あらん友」がいるというのである。

4さのみ目にて見るものかは　そうむやみに目だけで見るものだろうか（いやそうではない）。前段落までの例をふまえた上で、そもそもの「月・花」の見方・捉え方について目を向けるのである。本文冒頭の「花は盛りに、月はくまなきを見るものかは」が見る対象について意見を投げかけるものなのに対し、ここでは対象の見方そのものについての見解を強調している。

5閨　寝室。「閨の内ながらも」「春は家を立ち去らでも」は並列で「思へるこそ」にかかる。直接見ずともその情景を心中に想像し思い描く場として挙げられている。

5よき人　教養があり、情趣を解す立派な人。

6ひとへに好けるさま　ひたすら風流を好んでいる様子。

6興ずるさまもなほざりなり　楽しむ様子もあっさりとしている。「なほざりなり」は、かりそめである、いい加減である、真剣でない。だが、ここでは「よき人」のこととして書かれているので、あっさりとしている、適当な程度である、の意味で解する。

ようなことか。

答　想像によってさまざまな情趣が味わえることを頼りがいがあることとしている。

補　何を「頼もし」と感じているのか、読み取る。

問　**「よき人」（5行目）と同じ意味で用いられている言葉と対照的に用いられている言葉とをそれぞれこれ以前の部分から抜き出せ。**

答　同じ意味「こころあらん友」、対比的「かたくなる人」

補　「よき人」とは情趣を解する人のことであることから考える。

問　◉**「色濃く」（7行目）と対照的に用いられている語は、ここでは、何か。**

答　「よそながら」

補　「色濃く」は対象を存分に味わおうとするあまり見苦しい態度や行動につながること。

問　**「よそながら見ることなし。」（12行目）と同じ態度を説明している部分はどこか。**

答　「ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり」。

補　この部分は対象から引いている態度ではなく、しっかり鑑賞していながらそう見えない態度で、それを都会風だと作者は主張しているのである。

問　**本文中から係り結びを指摘してみよう。**

答　「庭などこそ」→「多けれ」
「かたくなる人ぞ」→「言ふめる」
「初め終はりこそ」→「をかしけれ」
「昔をしのぶこそ」→「言はめ」
「きらめきたるこそ」→「おぼゆれ」

補　「ぞ・なむ・や・か」を受けた文節は連体形で結ぶ。係り結びは強意の表現なので、文章を読解するうえでポイントになる、注目すべき部分であることが多い。

問　**反語の文はどのような働きをしているか。**

答　一般論を認めつつ、それに反する作者の主張を展開する足がかりとなっている。

補　「満開の花」「曇りなき満月」「成就した恋愛」という一般的に支持されていることを言い、それはもっともだが、それだけだろうか、と疑問を呈していく。そして、それ以外にも認められる場合を詳しく解説していくのである。この反語を手がかりとして、前問で考えた係り結びを用いて、自分の考えを強調していく。

問　**本文から、作者のどのような自然観照の態度が読み取れるか、まとめよ。**

答　物事の最高の状態がよいということを認めつつも、物事のはじめや終わりにもよさを見いだす態度。

7色濃く　しつこく。前項の「なほざりなり」とは対照的な態度である。その様子は以降の本文「花のもとには〜雪には下り立ちて跡つけ」に詳しく書かれている。情趣に欠ける「片田舎の人」に対する兼好の批判的な記述。

7あからめもせず　脇目もふらず。「あからめ」は短時間目をそらすこと。よそ見。

8まもりて　目を離さずにじっと見る。目守る。

12よそながら見る　それとなく見る。距離をおいて客観的に見ること。「よき人」の「興ずるさまもなほざり」な鑑賞態度と同様の態度である。

鑑賞

教科書の「花は盛りに」の部分は、「徒然草」第百三十七段の冒頭部分である。最も長い章段の一部ということになる。この段は長いだけではなく、作品全体の方向を決めているとも言われる重要な段とされている。作者、兼好の物の見方、捉え方が極めてはっきりとした形で提示されている。そのようなわけで、古来絶賛する人も多い一方、本居宣長のように「つくりみやび」として、激しく非難する向きもある。しかし、もともと兼好は王朝に憧れるところから、この作品を執筆したと言われている。文体も当時のものとは異なり、「擬古文」などと呼ばれる。そのような中で、作者の生きている時代には、失われてしまった「みやび」を復活させることは、たとえそれが頭の中だけのことであったにせよ、貴重なことであったと言わざるを得ない。宣長の主張は宣長の主張として、尊重しつつ、作者の主張にも耳を傾けたい。

さて、この部分では作者は物事の最盛期を尊ぶ風潮に対して一石を投じている。確かに、一番いいときだけを賛美し、それ以外は見向きもしないという人が少なくない。作者はその前後、「初め終はり」にも美が存すると主張する。また、実際に見ることはなくてもその美を味わうことができると言う。この主張は、当たり前のことを言っているようでありながら、なかなかここまではっきりとこう言う人はいないと思わせる主張である。そこが人間観察などにもたけていた作者の真骨頂を示している。人間とその心を観察した結果、作者の発見したことなのであろう。日本人はいい時ばかりではなく、物事のいろいろな面を見てきたように思う。この段とも重なる部分があるが、古来、かなえられない恋をどれだけ多くの歌に詠んできたことか。それを作者は我々に気づかせ、我々のよき伝統を再認識させてくれるのである。兼好の生きた時代にもすでに、「盛り」だけを愛でる人たちが存在したのであろう。そして、今現在も「盛り」だけを愛でる人たちがいる。そのような人たちに向かって、いつも兼好は我々の伝統に目を向けるように促すのである。そういう点では、歌の詞書を取り入れているところなどはいかにもうまい手法である。日本の伝統と日本人の心性を考えるよすががここにはある。

そうした伝統的な美について論じた作者の視点は、やがて美に対する人々の在り方に移る。後半部では情趣を知り、美を解する「よき人」と、風情を解さない「片田舎の人」との対比で兼好の自然観照の態度が明確に表れている。対象と距離を置き客観的な視点で楽しむこと、それは先の「盛り」だけではなく「初め終はり」の美を解する態度と同様で、物事を大きな流れの中で、あるがままに見ることによってこそ美の本質を捉えられるという一貫した美意識によるものである。

また、文章の修辞についても、注意を払いたい。反語と係り結びを巧みに用いながら、自分の考えを強調していく。このような論の主張のし方は、実生活の面でも役立てることができよう。ぜひ、ここから学んでおきたいことの一つである。

参考

「正徹物語」

「『花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは』と、兼好が書きたるやうなる心根を持ちたる者は、世間に、たゞ一人ならでは無き也。此心は生得にて有る也。」　（日本古典文学大系）

「玉勝間」　兼好法師が詞のあげつらひ

「けんかうほうしがつれ〴〵草に、花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かはとかいへるは、いかにぞや、いにしへの歌どもに、花はさかりなる、月はくまなきを見たるよりも、花のもとには、風をかこち、月の夜は、雲をいとひ、あるはまちをしむ心づくしをよめるぞ多くて、こゝろ深きも、ことにさる歌におほかるは、みな花はさかりをのどかに見まほしく、月はくまなからむことをおもふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを嘆きたるなれ、いづこの歌にかは、花に風をまち、月に雲をねがひたるはあらん、さるをかのほうしがいへるごとくなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の、つくり風流にして、まことのみやびごゝろにはあらず、かのほうしがいへる言ども此たぐひ多し、皆同じ事也、すべてなべての人のねがふ心にたがへるを、雅とするは、つくりことぞおほかりける、（以下略）」　（岩波日本思想大系）

コラム

『徒然草』は本当に「随筆」なのだろうか？

『徒然草』は「随筆」（＝作者の思想・所感・経験などを書き記した作品）である。…という点について、私たち教員はしばしば授業で「常識」として説明するし、この指導書でもそのことを前提として解説を施している。しかし、ここでは、その「常識」に一度「待った」をかけてみたい。渡部泰明氏は近年、『徒然草』は、通常言われるような「随筆」として見るべきではな」く、「思考実験の書であり、表現試行の作品と見るべきだ」という斬新な提言をされている（「言葉によって『心』はどのように表現されるのか」『人文知１心と言葉の迷宮』二〇一四年、東京大学出版会）。

「つれづれなるままに…ものぐるほしけれ」という『徒然草』の序文を思い起こしてみよう。ここには、「とりとめもなくうつろいゆく心を書きとめることの、狂気じみた危うさが吐露されて」おり、それだけに、「心を表現する可能性の模索に務めた自負を込めている」と、渡部氏は指摘する（前掲書）。固定的な説明を施しがたい、不安定な「心」のありようを綴った作品が『徒然草』であるならば、作者の思想がありのままに反映される「随筆」として分類することにはいささか違和感を覚える、というのである。

以上の渡部氏の指摘をヒントにしながら、「ある人、弓射ることを習ふに」を再読してみたい。「この章段が一体何を伝えようとしているのか？」という問いに対して、授業では章段全体を貫く包括的な解答を生徒に求めることが多い。「弓射ることを習ふ」「道を学する」という二つの話題に共通する「戒め」を読み取らせようとする試み（→研究１）などは、その代表例といえよう。

しかし一方で、「この一矢に定むべし」という前半の力強い言説が、後半ではいつの間にか「ただ今の一念において、直ちにすることのはなはだかたき」という自信なさげな物言いに変容しており、必ずしも固定化された作者の思想が語られているわけではないようにも考えられる。むしろ、作品を素直に解釈すればするほど、論点がとめどなく変化してゆくなかで全体を貫く主題が形成される点も、この章段の特徴と言えるのではないだろうか。

従って、研究１の解説の際には、「共通点を見出すことも大切だけれども、前半から後半にかけて、次第に論点がずれていくことにも着目しよう」という具合に、あえて異なる視点を示すのも興味深い提案になると思われる。人の心は絶え間なくうつろいゆくもので、その揺れ動く心の動きを文章化するという困難な作業に挑戦した作品が『徒然草』なのではないか。固定的な観念に捉われず、一歩距離を置いて「常識」を相対化する視点を、『徒然草』は与えてくれているのではないか。「常識」に捉われない、新しい発想を積極的に授業に取り入れることは、私たち教員自身が『徒然草』を楽しむために必要な姿勢なのかもしれない。

（小林　俊洋）